

## ラグビーの精神的特性とその背景

千葉工業大学 東谷 拓

はじめに……ラグビーはスポーツの母国、イギリスにおける代表的な球技の一つである。1823年にその原型がラグビー校において誕生して以来150年の間に多くの国々の人々の手を経て今日に至っている。スポーツの近代化や社会的背景の変化、若者たちの考え方の変化などさまざまな要因に影響されながら少しずつ変化はみられるものの依然として19世紀のイギリスにおけるスポーツに対する考え方が多面にわたって残存している。このことは大変すばらしいことである反面、現代社会にあっては他の競技に比較して奇異に感じられる面も少なくない。

例えばレフリーの問題である。何故たった一人の審判しかいないのか、天候にかかわらず試合を行うのは何故か、対抗戦形式が重視されている理由は何かなど、色々ある。

今回はこれら他の競技にはみられぬ特性について、それらの決まりの根源となっている精神的背景を歴史的な考察を加えながら考え直してみたいと思う。そしてさらに一歩進めて、我々は今の時代においてラグビーという運動文化の伝承者として、今後どのような形で後世に伝えて行ったら良いかを考えてみた。

①ノーサイドの精神……ラグビーの試合終了の合図は「ノーサイド」である。このことばはラグビー以外のいかなる競技にも使われていない。意味としてはNO SIDE、つまり試合終了後は敵のサイドも味方のサイドもなく、同じ競技の愛好者として友情を深める、という意味につかわれている。しかしながら歴史的にみると「ノーサイド」ということばは、本来それほど友好的なものではなかった、と「近代スポーツ批判」の中で中村敏雄氏は述べている。それによると、1800年代のイギリスにおけるフットボールの試合は大変粗野で野蛮なスポーツであり、けんかさながらであったという。それ故、レフリーは「タイムアップ」

とか「ゲームセット」などというなまやさしい表現では彼らの興奮をおさえることが出来ず、「ノーサイド」とさげんで双方のチームを分けなければならなかった、というのが本当である。と述べている。又、英国の人文学者トーマス・エリオットも「フットボールは野獸的憤激と極度の狂暴性以外の何ものでもなく、そのため怪俄がおこりやすく、従って傷ついたものが敵意や怨念を抱くことになる。故に永久にほうむり去るべきである。」と述べている。しかしながら、このような荒々しさ故に男性のスポーツとしてもはやされ、18～19世紀のパブリックスクールでは教材にまでとり入れられるようになる。そしてスポーツを通して学校の自由と規律の確立に力を注いだのがラグビー校長のトーマス・アーノルドであった。ノーサイドの精神や、審判尊重など現在我々が受けついできている精神的要因はこの頃築かれたものである。

②レフリーとその権限……ラグビーは数多い球技の中でも、最も多人数で行われるスポーツである。又、競技場も広く、本来、たった一人のレフリーでプレーを裁くのは公平ではないのではないかと、という声をよく聞く。概してイギリスを母国とするスポーツは審判員が少なく、アメリカ型は多い。このような違いはどこからきたものであろうか。ラグビーにおいては当初ははっきりしたルールもなく又、審判もおらず、約束ごととは全て両軍の代表者で決定した。全て自発的で相手もプレーさせ自分達も思い通りプレーする方針でことが足りた。やがてこれらの代表者が審判にあたるようになり、さらに中立者に全権をまかせることになる。このように、レフリーは歴史的にみると、あくまで両チームの代表者であり、また、ゲームというものは「勝敗という結果より、その過程が大切である。」（自由と規律 池田潔）のであるから、レフリーは一人で充分であり、その判定に

は絶対承服するという考えになる。これに対して、プレイヤーのためにミスジャッジを少しでも少なくし公平な審判ができるようにという配慮から、又、アメリカ人的な合理的、権利意識的な考え方からアメリカ型のスポーツでは審判負を多くおくことになるのである。

③その他……この他にもラグビー独得の取り決め、慣例など数多くある。紙面の関係でそれら個個についての詳細な説明は省略するが、次に項目のみ列挙してみたい。

ラグビーの勝敗観、タッチジャッジ(線審)は審判かプレイヤーか?。対抗戦形式尊重の理由、選手交代の制限、試合日程の変更を行わない理由、などである。これらのことは一般ファンはもとより、プレイヤー自身もその本当の理由を理解していない者が多い。

ラグビープレイヤーはただ単に技術を上達させるだけでなく、これらのルールの根拠となっている精神的背景を理解しなければ本当にラグビーという競技を知ることはできない。

19世紀の英国において誕生したこのラグビーというスポーツは、以来百有余年の間にルールの若干の変更などはあったにしてもその本質は変ることなく多くの国々の若人たちによって育てられ、みながあげられてきたはずである。これはまさしくスポーツマン綱領にあるように、音楽や絵画などと同様、人々にうるおいを与え、人間性を向上させる大切な文化である。それ故、ラグビーにたずさわる全てのプレイヤーや指導者たちはその根底に流れるラグビースピリットを良く理解、尊重し、時代の流れや社会的要求も考慮に入れて次の世代に伝承して行くべき義務を負っているであろう。

# ラグビーの精神

ラグビーの精神は、単に勝つことだけでなく、公平な審判を求め、選手交代の制限、試合日程の変更を行わない理由、などである。これらのことは一般ファンはもとより、プレイヤー自身もその本当の理由を理解していない者が多い。ラグビープレイヤーはただ単に技術を上達させるだけでなく、これらのルールの根拠となっている精神的背景を理解しなければ本当にラグビーという競技を知ることはできない。19世紀の英国において誕生したこのラグビーというスポーツは、以来百有余年の間にルールの若干の変更などはあったにしてもその本質は変ることなく多くの国々の若人たちによって育てられ、みながあげられてきたはずである。これはまさしくスポーツマン綱領にあるように、音楽や絵画などと同様、人々にうるおいを与え、人間性を向上させる大切な文化である。それ故、ラグビーにたずさわる全てのプレイヤーや指導者たちはその根底に流れるラグビースピリットを良く理解、尊重し、時代の流れや社会的要求も考慮に入れて次の世代に伝承して行くべき義務を負っているであろう。